

四條金吾殿御返事

文永九年五月二日 五一歳

日蓮が諸難について御とぶらひ、今にはじめざる志ありがたく候。法華經の行者としてかゝる大難にあひ候は、くやくしくおもひ候はず。いかほど生をうけ死にあひ候とも、是ほどの果報の生死は候はじ。又三悪四趣にこそ候ひつらめ。今は生死切断し仏果をうべき身となればよろこばしく候。

天台・伝教等は迹門の理の一念三千の法門を弘め給ふすら、なを怨嫉の難にあひ給ひぬ。日本にして伝教より義真・円澄・慈覚等相伝して弘め給ふ。第十八代の座主は慈慧大師なり、御弟子あまたあり。其の中に檀那・慧心・僧賀・禅瑜等と申して四人まします。法門又二に分かれたり。檀那僧正は教を伝ふ。慧心僧都は觀をまなぶ。されば教と觀とは日月のごとし。教はあさく、觀はふかし。されば檀那の法門はひろくしてあさし、慧心の法門はせばくしてふかし。今日蓮が弘通する法門はせばきやうなれどもはなはだふかし。其の故は彼の天台伝教等の所弘の法よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事とは是なり。南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し。されども三世の諸仏の師範、十方薩埵の導師、一切衆生皆成仏道の指南にてましますなればふかきなり。

經に云はく「諸仏智慧甚深無量」云云。此の經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏、真言宗の大日如来、浄土宗の阿弥陀、乃至諸宗諸經の仏菩薩、過去未来現在の総諸仏、現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて、次に智慧といへり。此の智慧とはなにもものぞ、諸法実相十如果成の法体なり。其の法体とは又なにもものぞ、南無妙法蓮華經是なり。釈に云はく「実相の深理本有の妙法蓮華經」と云へり。其の諸法実相と云ふも、釈迦多宝の二仏とならうなり。諸法をば多宝に約し、実相をば釈迦に約す。是又境智の二法なり。多宝は境なり、釈迦は智なり。境智而二にしてしかも境智不二の内証なり。此等はゆゑしき大事の法門なり。煩惱即菩提・生死即涅槃と云ふもこれなり。まさしく男女交会のとき南無妙法蓮華經ととなふるところを、煩惱即菩提・生死即涅槃と云ふなり。生死の当体不生不滅とさとりより外に生死即涅槃はなきなり。普賢經に云はく「煩惱を断ぜず五欲を離れず、諸根を淨むることを得て諸罪を滅除す」と。止觀に云はく「無明塵勞は即ち是菩提、生死は即ち涅槃なり」と。寿量品に云はく「毎に自らは是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得せしめん」と。方便品に云はく「世間の相常住なり」等は此の意なるべし。此くの如く法体と云ふも全く余には非ず、たゞ南無妙法蓮華經の事なり。

かゝるいみじくたうとき法華經を、過去にてひざのしたにおきたてまつり、或はあなづりくちひそみ、或は信じ奉らず、或は法華經の法門をならうて一人をも教化し、法命をつぐ人を、悪心をもてとによせかくによせおこづきわらひ、或は後生のつとめなれど

も、先づ今生かなひがたければしばらくさしをけなんど、無量にいひうとめ謗ぜしによ
て、今生に日蓮種々の大難にあうなり。諸経の頂上たる御経をひきくをき奉る故により
て、現世に又人にさげられ用ひられざるなり。譬喩品に「人にしたしみつくとも、人心
にいれて不便とおもふべからず」と説きたり。

然るに貴辺法華経の行者となり、結句大難にもあひ、日蓮をもたすけ給ふ事、法師品
の文に「遣化四衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷」と説き給ふ。此の中の優婆塞とは
貴辺の事にあらずんばたれをかさゝむ。すでに法を聞いて信受して逆らはざればなり。
不思議なり、不思議なり。

若し然らば日蓮法華経の法師なる事疑ひなきか。「則如来使」にもにたるらん「行如
来事」をも行ずるになりなん。多宝塔中にして二仏並坐の時、上行菩薩に譲り給ひし
題目の五字を日蓮粗ひろめ申すなり。此即ち上行菩薩の御使ひか。貴辺又日蓮にしたが
ひて法華経の行者として諸人にかたり給ふ。是豈流通にあらずや。法華経の信心をとを
し給へ。火をきるにやすみぬれば火をえず。強盛の大信力をいだして法華宗の四条金吾
・四条金吾と鎌倉中の上下万人、乃至日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ。あしき名
さえ流す、況んやよき名をや。何に況んや法華経ゆへの名をや。女房にも此の由を云ひ
ふくめて、日月両眼さうのつばさと調ひ給へ。日月あらば冥途あるべきや、両眼あら
ば三仏の顔貌拜見疑ひなし。さうのつばさあらば寂光の宝刹へ飛ばん事須臾刹那なる
べし。委しくは又々申すべく候。恐惶謹言

五月二日

日蓮花押

四条金吾殿御返事